

贅沢なご飯

広島県立広島叡智学園中学校

三年 秋吉 玲奈

「ご飯と漬物があったら、こんな贅沢はないよ」と、昔、おばあちゃんが言っていたのを覚えている。

おばあちゃんとは、私のひいばあちゃんのことだ。私はひいじいちゃん、ひいばあちゃんのことをつもおじいちゃん、おばあちゃんと呼んでいる。

おじいちゃんたちは、山の中に住んでいた。昔は田んぼでお米を作っていて、田植えと稲刈りは家族みんなで手伝っていた。私はまだ小さかったのであまり覚えていないが、母から聞いた話と私が覚えていることを今から話そうと思う。

そのあたりは、どこの家もお米を作っているのだが、おじいちゃんのお米はおいしいと評判だった。おじいちゃんの田んぼは山のてっぺんにあった。毎日、朝夕と田んぼを

見に行き、水の量を調整したり、虫はついていないか肥料は足りているか、など見たりして手塩にかけて育てていた。山からのキラキラ輝く水を引くため、山に入っては落ち葉をよけていた。米作りは大変だ。一粒でも落とさないよう、残さないよう言われていたのは作り手の苦勞に気付き、感謝の気持ちを持ちなさいということなのだと思う。

おいちやんの田んぼはおひさまが良く当たり、収穫の頃は田んぼ一面が眩しいほどの黄金色になった。よく実った稻穂がずっしり頭を垂らして、風に吹かれて揺れるのは稻の葉だけ。精米したお米はピカピカ光り、そのまま食べても甘くておいしかった。そんな評判の良いお米ができる理由をおじいちゃんはこの言った。

夜中に気温がぐっと下がって、昼と夜の気温差が大きいいよいよお米ができるんね。そう、この場所。おいしいお米ができるのは、条件のそろったこの場所なんだ。私は知らない

か。た。きれいな水が大事だと思っ
ていた。もちろん、水も大事だと思
う。でもそれ以上に気候が関わっ
ているとは思わなかった。おい
しいお米ができるためには、その
土地がもっ気候が大事なんだ。た
だ残念なことにもうここではお
米は作っていない。田んぼの跡
形もない。あのお米の味を知ること
はもう二度とない。すごいものを失
ったと思う。でも私にはどうする
こともできない。

これが現代社会の現実なのだと思
う。田んぼをしていた人が高齢化
し、若者達は別の仕事をす
る。どんなにおいしいお米がと
れても、働き手がなければそこ
で終わってしまう。いろいろな地
域で、それぞれ特別なお米が
できていたことだろう。そこ
では会話が弾み、笑い声が溢
れていただろう。でももう戻
ることはない光景なのかもしれ
ない。今現在のお米は、区画整
備された大きな機械の入る田
んぼで生産されるものが多
い。そのお米を買って毎日
ご飯が食べられるのだから

ら何の問題もない。そこにはないのは、米作り
で深まる家族の絆なのかもしれない。
ずっとお米を作ってきたおじいちゃんも年
をとって、田んぼをする最後の年は歩くのもや
っとという感じだった。一歩一歩ゆっくりにゆ
っくり山に入り水の世話をし、ゆっくりにゆっ
くり田んぼに向かい、しばらく長いこと眺め
てから帰って来た。それから間もなくして、
おじいちゃんはずなくなった。あとから聞いた
話だが、おじいちゃんはずくなる前に
「米が食べたいのぉ。」
と言ったらしい。おばあちゃんは、「おじいち
やんが作ったお米を炊き、最期におじいちゃ
んに食べさせたそうだよ。古米だったのか古古
米だったのか分からないが、おじいちゃんはお
いしそうに食べたという。おばあちゃんはお
いつかおじいちゃんと一緒に食べようとお
じいちゃんの作ったお米をとっておいただ
ろう。何よりも贅沢なご飯を。」